

第1章 1993年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎 清水芳裕 古賀秀策

1 調査の経過

京都大学構内のほぼ全域には、縄文から近世にいたる各時代の遺跡が埋積している。このため、京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパス及び付属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1993年度には、以下の発掘調査5件、試掘調査1件、立合調査6件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	理学部動・植物学科等校舎新営予定地(第二期)(北部構内BB28区)	(第3章, 図版1-217)
	文学部等校舎新営予定地(本部構内AW25区)	(第4章, 図版1-218)
	工学部RI施設棟新営予定地(本部構内AU30区)	(第2章, 図版1-219)
	総合人間学部人間・環境学科校舎新営予定地(総合人間学部構内AO22区)	(発掘中, 図版1-220)
	理学部基礎物理学研究所研究棟新営予定地(北部構内BF34区)	(発掘中, 図版1-221)
試掘調査	ウイルス研究所生物研究棟新営予定地(病院構内AF12区)	(第1章, 図版1-222)
立合調査	吉田地区基幹整備工事(本部構内AW30区)	(図版1-223)
	医学部放射線生物研究棟予定地(医学部構内AN20区)	(図版1-224)
	医学部4号館校舎新営予定地(医学部構内AM18区)	(図版1-225)
	病院地区基幹整備工事(病院構内AH14区)	(図版1-226)
	生体医療工学センター実験研究棟新営予定地(病院構内AG13区)	(図版1-227)
	ウイルス研究所実験研究棟新営予定地(病院構内AG10区)	(図版1-228)
資料整理	工学部機械工学科等研究実験棟新営予定地(本部構内AV30区)	(第2章, 図版1-214)

2 調査の成果

前節であげた調査のうち、1993年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、AU30区・AV30区、BB28区、AW25区の発掘調査については第2章、第3章、第4章で、それぞれ詳述している。

本部構内AU30区・AV30区とAW25区の調査では、吉田山西麓と本部構内一帯の先史時代から近世にかけての新たな知見が多く得られた。まず縄文時代では、AW25区から時期を後期中葉に限定できる良好な一括資料が得られた。分布の中心は調査区の北半にあり、北方あるいは東北方への遺跡の広がりが想定できる。弥生時代では、AU30区で山裾に沿って北東から南西にはしる流路から、突帯文土器と遠賀川式土器がまとまって出土し

た。これらの成果は、これまで先史時代の遺物や遺構に関する情報の希薄であった本部構内における、先史時代の地形環境や人々の活動の様子を知るうえで重要な資料となる。また、AW25区で検出した弧状の平面を呈する濠状遺構は、7世紀代の遺物を含み、111地点での方墳やAV30区と168地点での埋納土坑の存在などを考慮すると、古墳終末期の円墳の周濠である可能性も考えられる。

中世では、土地利用に関する興味深い事実が判明した。まず、AW25区では、13世紀中葉に廃絶された井戸は廃棄物の捨て場となり、その後これに近接して集石墓や土壙墓が設けられており、この地一帯の土地利用が生活空間から埋葬空間へと変容していることが明らかとなった。またAU30区では、弥生時代の流路埋積後の凹地の西側に井戸、柱穴群や建物跡がまとまりをみせるのに対して、凹地内には土器溜群などの遺構が集中する状況を呈しており、生活空間と廃棄または祭祀に関わる空間の使い分けが指摘できる。また後者では、凹地が古代～中世の溝の方向をも規定しており、先史時代からの自然地形が周辺一帯の土地利用に関しても大きな影響を与えていたことが明らかになった。AV30区の北辺では、14世紀の砂取り穴を発見した。中世の志賀越え道南方のこの辺り一帯が、大規模な砂取りの場所であったことが明らかとなった。

北部構内BB28区の調査では、弥生前期末～中期初頭に白川の洪水により一時期に堆積した黄色砂層の下に、土石流の跡を確認した。東北方約100mの109地点では、西流する土石流の南限を検出しており、弥生前期に北部構内南部を横切っていたとされる河道は109地点付近で分流し、このうちの南流する一支流を検出したものと思われる。また、縄文晩期～弥生前期の遺物包含層を貫通して噴出する噴砂と、黄色砂層中で検出した堆積層の乱れは、地震にともなう堆積物の圧密液化現象の跡と思われる。古代～中世の溝や土坑などの遺構は、ほぼ方向を同じくし位置も近接しており、これらの遺構の示すラインは、この地一帯の土地利用の境界であった可能性が大きいことを明らかにした。

病院構内AF12区の試掘調査では、工事予定地にL字状のトレンチ150m²を設けて遺構の確認をおこなった。南側の192地点では、近世後半における南北方向の路面沿いに耕作関連の井戸や野壺が集中して見つかっており、今回も同様な状況が予想された。調査の結果、同時期の遺物包含層の広がり確認できたものの、少量の柱穴と路面の北へのつづき以外に遺構は存在せず、その下は無遺物の砂礫層であった。井戸や野壺はある程度限られた範囲にまとまって設置されていたと想定される。包含層中より整理箱3箱の陶磁器類が出土したほか、表土中より弥生後期の甕形土器片1点を採集している。